

「フェイク シティ ある男のルール」☆☆☆☆

2009（平成21）年1月15日鑑賞<角川映画試写室>

監督：デヴィッド・エア

脚本：ジェームズ・エルロイ、カート・ウィマー、ジェイミー・モス

トム・ラドロー（ロス市警刑事）／キアヌ・リーブス

ジャック・ワンダー（ロス市警警部、ラドローの上司）／フォレスト・ウィテカー

ジェームズ・ビッグス（ロス市警警部、内部監査部）／ヒュー・ローリー

ポール・ディスカント（ロス市警刑事、ラドローの新相棒）／クリス・エヴァンス

テレンス・ワシントン（ロス市警刑事、ラドローの元相棒）／テリー・クルーズ

リンダ・ワシントン（テレンスの妻）／ナオミ・ハリス

グレイス・ガルシア（看護師、ラドローの恋人）／マーサ・ヒガレダ

2008年・アメリカ映画・109分

配給／20世紀フォックス映画

<ロス市警の腐敗と内部抗争は？>

08年12月15日に観た『チェンジリング』（08年）は、1920～30年代にかけてのロス市警の腐敗が大きなテーマだった。またキム・ベイシングーが第70回アカデミー賞助演女優賞等を受賞した『L. A. コンフィデンシャル』（97年）は、ロス市警の腐敗と内部抗争が大きなテーマだった。そんな視点で『フェイク シティ ある男のルール』を観ると、ロス市警の腐敗と内部抗争ぶりは今も全く変わっていないようだ。そう考えると、日本の警察も時々悪いことをしているが、ロス市警に比べればかなりマシ・・・？

<邦題VS原題>

ところで、あなたは邦題の「フェイク」って何の意味かわかる？英語力不足の私にはわからなかったため調べてみると、これは①・・・をでっち上げる、②・・・に手を加える、③・・・のふりをするという意味。つまり、ロサンゼルスはそういう悪さをするまちだと決めつけたのがこの邦題・・・？またサブタイトルの「ある男のルール」は、この映画の主演ロス市警の刑事トム・ラドロー（キアヌ・リーブス）の破天荒な生き方をストレートに表現したものだ。

これに対して、原題は『Street Kings』だが、この「Kings」と複数形になっているところがミソ。似たようなタイトル（？）の『ラストキング・オブ・スコットランド』（06年）における圧倒的な存在感でアカデミー賞主演男優賞をはじめ25以上の賞に輝いたフォレスト・ウィテカーが、ラドローの上司ジャック・ワンダー役として登場するから、彼がキング候補の1人であることは容易に想像できる。しかして、もう1人のキング候補は？

さて、あなたはこの映画を邦題の視点で鑑賞、それとも原題の視点で鑑賞・・・？

<こんなのあり？アメリカは適正手続の国では？>

私が司法試験に合格した後、泥縄式に勉強したのが刑事訴訟法。その中で学んだのが、戦後憲法の制定とともに根本的に改正された刑事訴訟法は、それまでの大陸法ではなくアメリカ法の適正手続に180度転換したこと。令状主義の意義や、自白のみで有罪とされないことをはじめとする証拠法則の意義を大きな感動をもって勉強したものだ。

ところが、この映画の冒頭に登場するラドローの誘拐犯逮捕、いや殺害のやり口は、およそ適正手続とは程遠い無茶苦茶なもの。ラドローは今、車のトランクにマシンガン積み込んで犯人たちと接触し、殴られたり蹴られたりしているが、これはすべて計算づく。つまり、犯人たちのアジトを追跡するため。誘拐された2人の少女を救出するという目的は正当だが、そこでの警察の任務は犯人を逮捕することであって、犯人を殺してしまうことではないはずだ。しかし、ボコボコに殴られた腹いせもあるのか、犯人たちのアジトにたどり着いたラドローはドアを蹴破ると、その腕前に任せて（？）犯人たちを全員射殺してしまうことに。

そして、2人の少女に「これで安心だよ」と声をかけた後、何と「フェイク活動」を。つまり、犯人を逮捕するべく乗り込んだところ、反撃されたのでやむなく全員を射殺したと「フェイク」するわけだ。アメリカでは、そしてロスではこんなのあり？これでは適正手続の国アメリカが泣くのでは？

しかも私が許せないのは、2001年12月の危険運転致死傷罪の制定以降、飲酒運転の厳罰化がやっと定着してきている今、ラドローが犯人逮捕（射殺？）に向かう車の中で、ウォッカのミニボトルをラッパ飲みしていること。これを一体どう解釈すれば・・・？

<ラドローの元相棒は？事件の発端は？>

『海猿』（04年）の大ヒット以降、日本では「パディ」という言葉が定着したが、刑事言葉としては『相棒』シリーズのようにまだまだ「相棒」という言葉の方が強いようだ。しかして、基本的に2人1組で行動することが義務づけられているラドロー刑事の元相棒は黒人のテレンス・ワシントン（テリー・クルーズ）。今はラドローとワシントンは仲違いしているようだが、それは一体なぜ？

それは、ラドローの傍若無人で強引かつ手柄を独り占めするやり方に反発したワシントンが、ラドローの違法捜査ぶりを内部監査部のボスであるジェームズ・ビッグス警部（ヒュー・ローリー）にチクったため。単細胞の（？）ラドローはそれに怒り、ワシントンに殴りかかろうとしたが、それを制止し「ワシントンに近づくな！」と忠告したのがワンダー。そんな忠告にもかかわらず、ラドローがワシントンの後をつけ回したところに、ハプニング的に巻き込まれたのがコンビニ内での覆面2人組による強盗、銃乱射事件だ。ラドローは単にワシントンを殴ってやろうと思っていただけだが、ワシントンは2人組からマシンガンの乱射を受けてあえなく死亡。ラドローは何とか難を逃れたものの、犯人に向けて発砲したつものラドローの弾丸の1発が、ワシントンの肩に命中していたからヤバイ。

もちろん、店の監視カメラにはそんな様子が録画されていたが、このDVDを見ればワシントンを憎んだラドローがコンビニ強盗を雇ってワシントンを殺害させたことと解釈することも十分可能。したがって、現場に駆けつけたワンダーはしこたまラドローを叱りつけたが、これまでいつもラドローの刑事としての能力を評価し、頼りにしているワンダーは店員が録画をサボっていたことにすると宣言した（フェイクした）から、さらに問題は複雑化することに・・・。

<ワンダーが本部長に！すると次の署長は？次の市長は？>

『チェンジリング』ではロス市警の署長とロス市長が結託して悪事を働いていたが、今日開催されたロス市警本部長への昇進パーティーの主役はワンダー。ロス市警の慣習では、刑事畑のワンダー警部より内部調査畑のビッグス警部の方が本部長昇進の可能性が高かったらしいから、ワンダーは今鼻高々・・・？いつも自信タップリに命令を下し、見事にコトを収めていくワンダーはラドローにとっても頼り甲斐もある上司。彼にとっては恋人である看護師のグレイス・ガルシア（マーサ・ヒガレダ）と共に、数少ない心を許せる人間だった。

そんなワンダーが2人組によるワシントン殺しについてもビッグスの内部調査をうまくはぐらかした結果、新聞にはワンダーですらワシントンを救出することができなかったという好意的な記事が載ることに。これによって、ラドローはひと安心。そして、ワシントン殺し事件は一件落着、と思えたが、『L. A. コンフィデンシャル』や『ブラック・ダリア』の原作者であるベストセラー作家ジェームズ・エルロイが脚本を手がけているこの映画はそれほど単純ではないはず。だってそうでなければ、単にラドローを庇護するだけの上司役に、フォレスト・ウィテカーのような大物俳優を起用する必要はないはずだから・・・。

<ラドローの新相棒は？事件の新たな展開は？>

元相棒のワシントンに代わって、ラドローの新相棒になるのがディスカント刑事（クリス・エヴァンス）。ワシントン殺し事件を調査する立場だったディスカントが、なぜラドローの相棒に？そこらあたりの機微が後々の大きなドンデン返しに繋がってくるからよく注意しながら観察したいが、オーソドックスな捜査しか知らないディスカントが、無茶な「捜査」を展開するラドローの相棒としてやっていくのは大変だ。

コンビニの犯行現場に残されていたDNAから、2人組はヘロインの売人で殺人罪にも問われていたフリーモントとコートズであることが明らかに。さらにこの2人はワシントンの内部告発のおかげで無罪放免となっていたうえ、ワシントンの身边には5万ドルという不明大金や、押収したヘロインを着服した証拠が発見されたから大変。ところが、妻のリンダ（ナオミ・ハリス）はそれについて何の弁解もしないまま・・・。

ラドローとディスカントはその後の強引な「捜査」の結果やっと2人組の家にとり着いたが、2人は既に死体となっていたから事件は振り出しに。本当に彼らがワシントンを殺したの？いや、それは違う。彼らの死亡にはさらにそのウラがあるはずだ。そう直感したラドローたちのさらなる行動は・・・？

<あつと驚くヒネリは？あつと驚く結末は？>

『インファナル・アフェア』3部作（02年、03年、03年）以降、「潜入捜査」を描いた面白い映画が多いが、麻薬にまみれた街ロスでは、マフィア組織への潜入捜査はないの？そんなあつと驚くヒネリが入ると、物語はさらに面白くなるのだが・・・？

また、本部長への出世レースでワンダー警部に敗けてしまったビッグス警部の巻き返しはないの？そんなしつこい内部抗争のヒネリが入ると、物語はさらに面白くなるのだが・・・？

ワシントン乱射事件は、ロス市警の腐敗と内部抗争という波乱要素を含んだまま、そしてまた上記のようなヒネリを加えながら（？）そんなこんなのスリリングな展開を見せていくことになるはずだ。しかして、最後に訪れる男同士の対決と、そこで見せつけられるあつと驚く結末とは？それはここでは絶対書けないので、あなた自身の目でしっかりと。

<検討の視点 その1ーラドローはヒーロー？それとも？>

ワンダーがラドローを重宝している理由は、ラドローが突撃隊長としての資質を持ち必ず成果をあげてくるから。もちろん、その強引な「捜査」にはやりすぎを通り越した明白な違法がたくさんあるが、それをもみ消すのが上司たるワンダーの役割。そんなラドローとワンダーの働きによって、極悪な犯罪者が事実上「処刑」されてこの世から消えていくことは、社会から見れば結果オーライなのかもしれないが、それでは法律はいらないし、適正手続もいらないことになってしまうのでは？

テロリストたちが大量破壊兵器を持っているという証拠がデッチあげたことが明らかになった今となっては、ブッシュ大統領によるイラク派兵に合理的な理由がなかったことは明白。そんなひどい証拠のデッチあげは、この映画でラドローがみせる、犯人殺害後に犯人の銃を発射させたり、冷蔵庫の中にヘロインを入れて証拠をデッチあげたり、というさまざまなフェイク活動と同じ・・・？

しかし、そんな「捜査」による事件「解決」に慣れてくれば、ラドローはきっと警察という組織の一員として働くしんどさよりも、私的処刑人としての快感を覚えてくるのでは・・・？もちろんこの映画は、人気絶頂のキアヌ・リーブスをヒーローとして扱ってはいないが、ちょっと頭の悪いカッコばかり重視する若者は、ひょっとしてキアヌ・リーブス演ずるラドローをカッコいいヒーローと誤解するのは・・・？そんなパカな見方だけはしてほしくないが・・・。

<検討の視点 その2ーワンダーの欲望は善？それとも？>

この映画の結末をハッキリ書くことは御法度だから、第2の検討の視点は少し書きにくい。ビッグス警部との出世レースに勝って本部長に就任し、さらに署長、市長の座を狙っているワンダーの圧倒的な存在感はこの映画でも健在。優秀な部下の能力を信じ、責任ある仕事を与え、結果を出せば大いに誉める。そして、少しのミスには目をつぶり、上司の権限でそれをヤミに葬ってしまう。それがワンダーの上司としての役割だから、ラドローが私的処刑人としての快感を覚えたのと同じように、後方から命令し、成果をきっちりと享受してきたワンダーも支配者としての充足感に浸っていたのでは・・・？しかし、果たしてそれでいいの？

そんな2人の連携が順調に続けば、きっとワンダーの将来は悪夢どおりに？しかし、権力を持った人間は腐敗するという古今東西の法則は、ワンダーには該当しないの？日本では、防衛庁事務方のトップに上りつめて4年間も次官をつとめ、「防衛庁の天皇」とまで言われた元防衛事務次官守屋武昌がゴルフ接待に沈んでしまったが、ワンダーは守屋次官とは違うの？それならいいのだが、そんなワンダーの欲望は善？それとも・・・？